

フィンランド語の受動現在分詞による非典型的な名詞修飾

—「状態構文」を中心に—

久保田 樹 (名古屋大学博士後期課程)

要旨

フィンランド語の受動現在分詞は、他の分詞にはない可能・義務・推奨といった意味も有している。受動現在分詞はそのモダリティの意味によって、名詞修飾用法に広がりを見せる。本来、受動現在分詞が修飾するのは、もとの動詞の目的語に相当する語である。しかし、事象叙述ではなく属性叙述の場合には、場所格補部に相当する語が修飾されることがあり、語彙化・形容詞化が進んでいる分詞に加えて、主名詞のサイズを表わす固定化した表現もある。さらに逸脱が大きい事例として、項ですらない *kunto* 「状態」が受動現在分詞で修飾されているものがある。この修飾関係は、文全体の主語が受動現在分詞のもとの動詞の目的語に相当する場合にのみ成り立ち、構文として捉えるべきである。

1. はじめに

フィンランド語には、現在分詞、過去分詞、動作主分詞、否定分詞があり、うち現在分詞と過去分詞にはそれぞれ能動と受動の形がある。特に現在分詞と過去分詞は多様な使われ方をするが、分詞の基本的な用法の一つに、名詞を修飾する形容詞的な用法がある。本稿では、受動現在分詞の名詞修飾のうち、非典型的な事例を扱う。

まず、分詞が修飾した名詞句の構造を概観する。分詞の名詞修飾は、主に書き言葉で使われる、圧縮された言い方である。以下に、現在分詞と過去分詞の表と、動作主分詞を加えた5つの分詞に修飾された名詞句(1-5 a)¹、関係詞で修飾された対応する名詞句の例(1-5 b)を挙げる。

	能動	受動
現在	-vA ²	-(t)A-vA ³
過去	-nUt	-(t)U

表1 分詞の対応関係

(1) 能動現在分詞

a. *maito-a juo-va poika* 「牛乳を飲んでいる少年」

牛乳-分格 飲む・能現分詞 少年

b. *poika, joka juo maito-a* 「牛乳を飲んでいる少年」

少年 関係詞・主格 飲む・3 単数 牛乳-分格

¹ (1)~(5)ではシンプルな例を挙げたが、場所格名詞や副詞も分詞に付随しうる。

(i) *huonee-ssa maito-a juo-va poika* 「部屋で牛乳を飲んでいる少年」

部屋-内格 牛乳-分格 飲む・能現分詞 少年

² フィンランド語には母音調和がある。本稿で、大文字の母音は、後舌母音と前舌母音両方を表わす(例えば A は a ないし ä)。

³ 受動現在分詞は、能動現在分詞の形態素・vA に、不定人称受動の・tA・が付加した形である。

(2) 能動過去分詞

- a. maito-a juo-nut poika 「牛乳を飲んだ少年」
牛乳-分格 飲む-能過分詞 少年
- b. poika, joka jo-i maito-a 「牛乳を飲んだ少年」
少年 関係詞-主格 飲む-過去.3 単数 牛乳-分格

(3) 受動現在分詞

- a. juo-tava maito 「飲まれている牛乳」
飲む-受現分詞 牛乳
- b. maito, jo-ta juoda-an 「飲まれている牛乳」
牛乳 関係詞-分格 飲む-不定人称受動

(4) 受動過去分詞

- a. juo-tu maito 「飲まれた牛乳」
飲む-受過分詞 牛乳
- b. maito, jo-ta juo-tiin 「飲まれた牛乳」
牛乳 関係詞-分格 飲む-不定人称受動.過去

(5) 動作主分詞

- a. poja-n juo-ma maito 「少年が飲んでいる／飲んだ牛乳」
少年-属格 飲む-動作主分詞 牛乳
- b. maito, jo-ta poika juo / jo-i. 「少年が飲んでいる／飲んだ牛乳」
牛乳 関係詞-分格 少年 飲む.3 単数 飲む-過去.3 単数

(3)(4)の例から分かるように、受動分詞が修飾する主名詞は、受動分詞のものの動詞（ここでは juoda 「飲む」）の目的語に相当する語（ここでは maito 「牛乳」）である。また、フィンランド語の受動は動作主が背景化され表示されない不定人称受動である。受動分詞に修飾された名詞句でも、動作主は滅多に現れない。ただ全く不可能という訳ではなく、動作主が標示される場合は、(6)のように、属格で受動分詞に前置される。

(6) poja-n juo-tava / juo-tu maito 「少年に飲まれている／飲まれた牛乳」

少年-属格 飲む-受現分詞 飲む-受過分詞 牛乳

動作主を明示する場合には、(5a)のように動作主分詞を用いるのが普通である。動作主分詞はその名の通り動作主が必須要素であり、動作主を表わす属格名詞がないと非文になる。

表1で示したように、受動現在分詞は、能動現在分詞とヴォイスにおいて異なり、受動過去分詞とテンス・アスペクトにおいて異なるように捉えられ得る。しかし実際はそれだけでなく、他の分詞にはないモダリティの意味も有している。通言語的にも非過去の受動分詞はモダリティ的な意味を持つ傾向があると言われている⁴が、フィンランド語の受動現在分詞も、単に「受動で表わされる現在の事象」を意味するよりむしろ、義務、可能、推奨といったモダリティ的

⁴ Haspelmath(1994)

な意味を持つことのほうが多い。

(7) a. makse-ttava lasku 「支払うべき勘定」

払う-受現分詞 勘定

b. syö-tävä sienii 「食べることができるキノコ, 食用のキノコ」

食べる-受現分詞 キノコ

c. lämpimä-nä syö-tävä ruoka 「温めて食べるのがよい料理」

温かい-様格 食べる-受現分詞 料理

モダリティ的意味の場合には、事象ではなく主名詞の性質を表わしていると言えるが、その場合、通常の規則からの逸脱が許されることがある。先ほど分詞修飾は書き言葉的だと述べたが、性質を表わす受動現在分詞は話し言葉でも普通に用いられる。文法的逸脱については、次章で詳述する。

2. 補部相当の語を修飾する受動現在分詞

2.1 語彙化・形容詞化した受動分詞

分詞には、語彙化が進んだ、言い換えれば形容詞化が進んだものがある。それらは、①erittäin 「とても」や melko 「ほぼ」等の程度を表わす副詞で修飾できる、②比較級や最上級になる、③接尾辞-sti や-n を付けて副詞化できる、④否定にする際は否定分詞にはせず、否定の接頭辞 epä-を付加する、といったように、通常の形容詞と同じ振る舞いをする(Koivisto 1987, ISK 2004 :620)。また、語彙化・形容詞化した分詞は、意味の特殊化が起こり、もとの動詞から意味的にずれている場合や、統語的に逸脱した修飾をする場合もある。通常は、以下の(8b)のように場所格補部相当の語を修飾することは不可能である。場所格補部を主名詞にしたい場合には、(8c)のように、関係詞の場所格を用いて関係詞節で修飾する。

(8) a. 動詞句 käydä kaupungi-ssa 「町を訪れる」

訪れる 町-内格

b. 分詞による修飾 *käy-tävä / *käy-ty kaupunki

訪れる-受現分詞 訪れる-受過分詞 町

「(int.) 訪れられる町／訪れられた町」

c. 関係詞節による修飾 kaupunki, jo-ssa käydä-än / käy-ttiin

町 関係詞-内格 訪れる-不定人称受動 訪れる-不定人称受動.過去

「訪れられる町／訪れられた町」

しかしこの規則から逸脱して、一部の心理動詞やコミュニケーション動詞の受動過去分詞は、入格や出格の場所格補部だった語を主名詞として修飾する。

(9) a. luottaa miehe-en / *mies-tä / *miehe-n 「男性を信頼する」

信頼する 男性-入格 男性-分格 男性-対格

b. luote-ttu mies 「信頼されている男性」

信頼する-受過分詞 男性

例えば(9a)で, luottaa 「信頼する」という動詞は自動詞であり, 信頼する対象として, 分格/対格目的語ではなく入格補部をとる。しかし, 動詞句で入格補部であった mies 「男性」が, (9b)では luottaa の受動過去分詞で修飾されている。入格・出格補部相当の語を受動分詞で修飾する動詞の例としては, 他に以下のものが挙げられる(Ikola 1981:65, ISK 2004: 523 より作成)。多くは受動過去分詞だが, 受動現在分詞の例もある。

(10) 入格補部を取る動詞とその受動分詞

luottaa 「信頼する」: luottava 「信頼できる」, tottua 「慣れる」: totuttu 「慣習的な」, uskoa 「信じる」: uskottava 「信頼できる」, uskoa 「信じる」: uskottu 「信頼されている, 親密な」, viitata 「言及する」: viitattu 「言及された」, vastata 「答える」: vastattu 「返事のあった」

(11) 出格補部を取る動詞とその受動分詞

huhuta 「噂する」: huhuttu 「噂の」, keskustella 「論じる」: keskusteltava 「話題になっている」, kiistellä 「論じる」: (paljon) kiisteltu 「(大いに) 論じられた」, kohua 「論じる」: kohuttu 「論じられた」, nauttia 「楽しむ」: nautittava 「楽しい」, puhua 「話す」: (paljon) puhuttu 「(大いに) 話題に上った」, vaieta 「沈黙する」: vaiettu 「語られない」

これらはどれも, 受動分詞が語彙化・形容詞化したものである。これらの受動分詞は, 事象ではなく主名詞の性質を表わし, 先に挙げた①~④の形容詞的振る舞いをする⁵。事象の解釈では, このような規則からの逸脱は起きない, つまり場所格補部は受動分詞で修飾されない。

2.2 サイズ等の属性を表わす受動現在分詞

受動現在分詞と主名詞が動詞-目的語ではなく動詞-場所格補部の関係である事例としては, サイズ等の属性を表わす決まった言い方もある。このパターンは生産性が低く, 部屋や家具が何人用かについて述べるもの(例(12)), 穴の大きさについて述べるもの(例(13))の二つに下位分類することが出来る。

(12) [人数(属格)]+[「住む, 座る, 横たわる」の受動現在分詞]+[「部屋, 椅子, ベッド」等]

a. kahde-n perhee-n asu-ttava talo 「二家族用の家」

2-属格 家族-属格 住む-受現分詞 家

b. yhde-n asu-ttava huone 「一人用の部屋」

1-属格 住む-受現分詞 部屋

c. kolme-n istu-ttava tuoli 「三人掛けの椅子」

3-属格 座る-受現分詞 椅子

⁵ もっとも, (10)(11)等に挙げた受動過去分詞がどれも①~④すべての振る舞いをする訳ではなく, 形容詞化の進み具合に程度の差はある。

d. kahde-n maat-tava puu-sänky 「二人用の木のベッド」

2-属格 横になる-受現分詞 木-ベッド

(13) [穴のサイズのモノ(属格)]+[「行く」の受動現在分詞]+[「穴」]

a. sorme-n men-tävä reikä 「指が通れるサイズの穴」

指-属格 行く-受現分詞 穴

b. käde-n|men-tävä aukko 「手が通れるサイズの穴」

手-属格|行く-受現分詞 穴

c. miehe-n men-tävä kolo 「男性が通れるサイズの穴」

男性-属格 行く-受現分詞 穴

このタイプも、受動現在分詞による名詞修飾の規則から逸脱している。動詞が自動詞であり、主名詞は受動現在分詞のもとの動詞の目的語ではなく場所格補部に相当する。例えば、(12a)で動詞 *asua* 「住む」の受動現在分詞に修飾されている名詞 *talo* 「家」は、(14a)のように文・動詞句では *asua* の目的語ではなく、内格補部である。同様に、(13)の主名詞 *reikä* / *aukko* / *kolo* 「穴」はどれも文・動詞句では目的語でなく入格補部である ((14b))。

(14) a. *Kaksi perhe-ttä asu-u talo-ssa* / **talo-a* / **talo-n*. 「二家族が家に住んでいる」

2 家族-分格 住む-3 単数 家-内格 家-分格 家-対格 (cf.(12a))

b. *Mies mene-e kolo-on* / **kolo-a* / **kolo-n*. 「男性が穴に行く。」

男性 行く-3 単数 穴-入格 穴-分格 穴-対格 (cf.(13c))

前節で論じたコミュニケーション動詞・心理動詞由来の受動分詞による名詞修飾と同様に、このタイプも事象ではなく、サイズという主名詞の性質を表わす。例えば、(12a)は、「二家族で住む用の、二家族で住むのに適したサイズの」という潜在的属性を表わしており、実際部屋に何家族住んでいようと問題ではない。狭いながらも三家族で住んでいてもいいし、誰も住んでいなくても構わない。これは、受動現在分詞が可能というモダリティ的意味を持っていることによる。

このパターンの特徴として、主語相当の語の属格名詞があることが挙げられる。受動分詞による名詞修飾では主語相当の属格名詞が現れることがほとんどないことは1章で述べたが⁶、このパターンでは、むしろ属格名詞が必要である。分詞だけが形容詞化・語彙化して特殊な意味を持っているのではなく、「何人用か」「何が通れるか」という部分が意味的に重要であり、主語相当の要素が主名詞のサイズを規定している。従来であれば、主語相当の語を明示する場合には、動作主分詞を用いる。しかし、このタイプは動作主分詞で置き換えることは出来ない。

⁶ 事象叙述の場合は滅多に分詞の主語相当の属格名詞と共に起しないが、属性叙述であれば、主名詞が目的語相当の通常の受動現在分詞による修飾であっても、主語相当の属格名詞が現れ得る。その場合も、本節で扱っている表現と同様、属格名詞の部分が、属性の規定に重要な役割を果たす。

(ii) *kaikki-en lue-ttava kirja* 「誰でも読める本」

全員-複数属格 読む-受現分詞 本

- (15) a. *kahde-n perhee-n asu-ma talo 「(int.) 二家族用の家／二家族が住んだ家」(cf.(12a))
 2-属格 家族-属格 住む-動作主分詞 家
- b. *miehe-n mene-mä kolo 「(int.)男性が通れる穴／男性が行った穴」(cf.(13c))
 男性-属格 行く-動作主分詞 穴

動作主分詞には受動現在分詞のようなモダリティの意味がなく、性質ではなく事象を表わすからである。性質を表わすのでなければ、分詞が場所格補部相当の語を修飾するといった逸脱は起きないため、「二人が住んだ部屋」「男性が行った穴」という事象叙述の解釈でも非文となる。

本節のパターンは、前節のように分詞が単独で語彙化・形容詞化しているのではなく、構造全体で表現が固定化している。また、前節と本節で扱った受動現在分詞による名詞修飾は、どちらも主名詞の属性を表わすものであり、そのことが通常の修飾規則からの逸脱を許す要因として考えられるが、属性叙述であればどのような表現でも逸脱が許されるわけではない。

3. 「状態構文」

本章では、いわゆる「外の関係」のような、受動現在分詞による名詞修飾を論じる。繰り返しになるが、受動分詞は本来、もとの動詞の目的語相当の語を修飾する。前章では、自動詞由来の受動分詞が場所格補部相当の語を修飾する事例を見た。それらは規則から逸脱した事例であるが、主名詞は補部相当であり、言い換えれば動詞の項ではある。しかし、目的語にも場所格補部にも相当しない語 *kunto* 「状態」が受動現在分詞で修飾されている例も存在する。*kunto* と似た意味であっても *kunto* 以外の語は主名詞として不可能で、かなり固定的な表現である。主名詞の *kunto* が固定的であり、修飾語には様々な動詞に由来する受動現在分詞が来ることから、各受動現在分詞が単独で語彙化・形容詞化して目的語相当以外の語も修飾できるようになった訳ではないことは明らかである。この表現は受動現在分詞の名詞修飾の中でもかなり特殊であり、フィンランド語最大の文法書 *ISK(2004)*にも記述はなく、管見の限り *Pekkarinen(2011: 48-49, 82-83)*で少し言及されているだけである。本章では、先行研究のほぼないこの表現について、詳細な記述と分析を試みる。

- (16) a. *Leipä on syö-tävä-ssä kunno-ssa.* 「パンは食べることができる状態だ。」
 パン be.3 単数 食べる-受現分詞-内格 状態-内格
- b. ... *panna tämä Haapamäe-n -Pori-n-rata ... juna-lla aje-ttava-an kunto-on*
 する この ハーパマキ-属格 ポリ-属格 道 電車-所格 運転する-受現分詞-入格 状態-入格
 「このハーパマキーポリ間の道を電車で通れる状態にする」(*Pekkarinen 2011 :49*⁷)
- c. *ne kypsy-vät nopea-sti syö-tävä-än kunto-on*
 それら 熟す-3 複数 早い-副詞 食べる-受現分詞-入格 状態-入格
 「それらは食べることができる状態に早く熟す」

(<http://mstrinile.blogspot.jp/2014/05/nokkosoosia.html>)

⁷ グロス、形態素分析、下線と訳は本稿執筆者による。引用に関して以下同様。

d. simä-t alka-vat hijalleen olla jo juo-tava-ssa kunno-ssa

ミード-複数 始まる-3 複数 ゆっくり be もう 飲む-受現分詞-内格 状態-内格

「ミードはもう飲める状態にゆっくりなりつつある」

(<http://maistuisvarmaansullekin.blogspot.jp/2013/04/vadelmasima.html>)

e. jarrupala-t ovat vaihte-ttava-ssa kunno-ssa 「ブレーキは換えるべき状態だ」

ブレーキ-複数 be.3 複数 換える-受現分詞-内格 状態-内格

(Pekkarinen 2011:49)

上の例(16)で、まず下線部だけに注目すると、名詞 *kunto* 「状態」は動詞 *syödä* 「食べる」、*ajaa* 「運転する」、*juoda* 「飲む」、*vaihtaa* 「換える」の目的語でも場所格補部でもないにも関わらず、各動詞の受動現在分詞で修飾されている⁸。言い換えれば、動詞と項の関係にない両者が、文法的に修飾-被修飾関係をなしている。下線部は主名詞にどの格を用いても動詞句や文には直せず、いわゆる外の関係と見なせる。

(17) **syödä* *kunno-n* / *kunto-a* / *kunno-ssa* / *kunno-sta* / *kunto-on* ... (cf.(16)a)

食べる 状態-対格 状態-分格 状態-内格 状態-出格 状態-入格

「*状態を／で／から／に食べる」

ただ、この表現は下線部だけ見るのでは不十分であり、文全体で構文として捉える必要がある。本稿では便宜上「状態構文」と呼ぶ。文全体で見ると、それぞれ、文の主語（「パン、道、それら、ミード、ブレーキ」）の状態について述べてられている。(16a)であれば、パンが腐っていない、十分焼けているなどの理由で、食べることができる状態であることを意味している。「食べることができる」対象物は「状態」ではなく「パン」である。つまり、「食べる」の目的語に相当するのは、受動現在分詞に修飾された主名詞ではなく、文全体の主語である。状態構文の主語は、受動現在分詞の主語や場所格補部／副詞に相当する語などではだめで、目的語相当の語でなくてはならない。例えば時間が空いている、おなかがすいているなどの理由で「私は食べることができる状態である」、またはきれいに片付いている等の理由で「部屋はそこで食べることができる状態である」等の文は非文である。

(18) a. **Minä ole-n* *syö-tävä-ssä* *kunno-ssa*. 「(int.) 私は食べることができる状態だ。」

私 be-1 単数 食べる-受現分詞-内格 状態-内格

b. **Huone on* *syö-tävä-ssä* *kunno-ssa*. 「(int.) 部屋は食べることができる状態だ。」

部屋 be.3 単数 食べる-受現分詞-内格 状態-内格

文全体の主語が文中の受動現在分詞の目的語に相当する受動現在分詞の用法としては、状態構文の他にも、可能構文、様格・変格での副詞的用法、英語で言うところの *tough* 構文的な表現がある。

⁸ 受動現在分詞と *kunto* が文法的に修飾-被修飾の関係にあることは、格の一致からも明らかである。

(19) a. 可能構文

Johtaja on tavat-tav-i-ssa. 「社長には会うことができる。」

社長 be.3 単数 会う-受現分詞-複数-内格

b. 様格での副詞的用法

Hän on sairaala-ssa tutki-ttava-na. 「彼は検査されるために病院にいる。」

彼 be.3 単数 病院-内格 検査する-受現分詞-様格

c. 変格での副詞的用法

Tämä on liian painava siire-ttävä-ksi. 「これは動かすには重すぎる。」

これ be.3 単数 あまりに 重い 動かす-受現分詞-変格

d. tough 構文的な表現

Kysymys on vaikea ratkais-tava. 「問題は解決するのが難しい。」

問題 be.3 単数 難しい 解決する-受現分詞

状態構文の主語は受動現在分詞の目的語に相当するため、(20b)のように両者をコンピュータでつないだり、(20c)のように受動現在分詞で構文の主語を修飾したり出来る。ただし、(20a)と(20b)は意味・ニュアンスが異なる。状態構文の(20a)は, *kunto* 「状態」という語があるために、腐っていない、炒めてある、毒抜きしてあるなどの理由で「食べることができる状態」であるというそのキノコの一時的な性質を意味する。それに対し、受動現在分詞の叙述用法である(20b)は、特に文脈がなければ、「毒はなく食用である」というそのキノコの属性叙述の解釈が一般的である。

(20) a. *Tämä sien*i* on syö-tävä-ssä kunno-ssa.*

この キノコ be.3 単数 食べる-受現分詞-内格 状態-内格

「このキノコは食べることができる状態だ。」

b. *Tämä sien*i* on syö-tävä.* 「このキノコは食べることができる (食用だ)。」

この キノコ be.3 単数 食べる-受現分詞

c. *syö-tävä sien*i** 「食べることができるキノコ, 食用のキノコ」 ((7b)再掲)

食べる-受現分詞 キノコ

状態構文(21a) ((16a)再掲) は, (21b)のように言い換えることが出来る。「食べる」対象は *kunto* 「状態」ではなく *leipä* 「パン」であり、文法関係にあるのは *syötävä* 「食べることができる」と *kunto* ではなく *syötävä* と *leipä* である。そのため、状態構文外では, (21e,f)のように受動現在分詞と *kunto* 「状態」が修飾関係や叙述関係をなすことはない。逆に言えば、受動現在分詞と *kunto* の文法的な修飾-被修飾関係は、状態構文でしか成り立たない。

(21) a. *Leipä on syö-tävä-ssä kunno-ssa.* 「パンは食べることができる状態だ。」

パン be.3 単数 食べる-受現分詞-内格 状態-内格

- b. Leipä on sellaise-ssa kunno-ssa, että si-tä voi syödä⁹.
 パン be.3 単数 そのような-内格 状態-内格 that それ-分格 できる.3 単数 食べる
 「パンは食べることができる状態だ。」
- c. Leipä on syö-tävä. 「パンは食べることができる。」
 パン be.3 単数 食べる-受現分詞
- d. syö-tävä leipä 「食べることができるパン」
 食べる-受現分詞 パン
- e. *(Leivä-n) kunto on syö-tävä. 「*(パンの) 状態は食べることができる。」 (cf. (21c))
 パン-属格 状態 be.3 単数 食べる-受現分詞
- f. * syö-tävä kunto 「(int.) 食べることができる状態」 (cf. (21d))
 食べる-受現分詞 状態

それに対して、受動現在分詞でなく(22)の hyvä 「よい」のように通常の形容詞であれば、kunto 「状態」と修飾関係・叙述関係を結ぶことができる ((22d,e))。

- (22) a. Leipä on hyvä-ssä kunno-ssa. 「パンはよい状態だ。」 (cf.(21a))
 パン be.3 単数 よい-内格 状態-内格
- b. Leipä on hyvä. 「パンはよい。」 (cf.(21c))
 パン be.3 単数 よい
- c. hyvä leipä 「よいパン」 (cf.(21d))
 よい パン
- d. (Leivä-n) kunto on hyvä. 「(パンの) 状態はよい。」 (cf. (21e)(22b))
 パン-属格 状態 be.3 単数 よい
- e. hyvä kunto 「よい状態」 (cf. (21f)(22c))
 よい 状態

(21a)のような状態構文の受動現在分詞は、状態そのものよりもある状態¹⁰を推論させるような記述である。だからこそ、パラフレーズした時に、(21b)のように、sellaisessa 「そのような」と että 「～という」を用いる。それに対して、(22a)の形容詞は、状態そのものを描写している。

意味に目を向けると、状態構文でも、受動現在分詞はモダリティ的な意味を持つ。(16a-d)は「~できる」といった可能の意味である。Pekkarinen(2011: 82)の状態構文の方言(話し言葉)のデータでは、可能の意味に限られるという。新聞(書き言葉)のデータからの(16e)は、ブレーキが古い、壊れそうといった理由で「換えるべき」といった意味であり、義務・推奨を表わす。パラフレーズすると、義務構文の(23)のようになる。

⁹ että 節中の sitä 「それ-分格」 (=leipä-ä 「パン」) は syödä 「食べる」の目的語である(主語は不在)。

¹⁰ 例えば、腐っていない、よく焼けているなど。

- (23) Jarrupala-t ovat sellaise-ssa kunno-ssa, että ne täyty-y vaihtaa¹¹.
 ブレーキ-複数 be.3 複数 そのような-内格 状態-内格 that それら しなければならぬ-3 単数 換える
 「ブレーキは換えるべき状態だ。」 (Pekkarinen 2011: 83)

4. まとめと今後の課題

以上フィンランド語の受動現在分詞の名詞修飾用法について論じたことをまとめる。受動分詞は、もとの動詞の目的語に相当する語を修飾する。ただし語彙化・形容詞化した受動分詞はその限りではなく、コミュニケーション動詞と心理動詞由来の受動分詞が入格・出格補部相当の語を修飾することがある。加えて、「大きさを規定するための属格主語+受動現在分詞+主名詞」という、名詞句全体で固定化した表現もある。家・部屋・椅子等と、穴のサイズを表わし、自動詞由来の受動現在分詞の場所格補部に当たる語が主名詞になっている。これらの事例に関しては、事象叙述ではなく属性叙述であることが、文法的逸脱を許す必要条件となっていることを示した。また、それらとは別に考える必要のある、修飾関係の逸脱が大きい事例として、受動現在分詞の項ですらない *kunto* 「状態」が主名詞の名詞修飾がある。文全体の主語が受動現在分詞の目的語に相当し、構文として扱うべきである。属性叙述の事例にしても状態構文にしても、受動現在分詞がモダリティの意味を持っていることが、固定的表現・構文の成立に大きく関わっている。モダリティという性質によって、受動現在分詞は他の分詞にはない名詞修飾用法の広がりを見せると言える。

本稿では、先行研究ではあまり扱われてこなかった、非典型的な受動現在分詞による名詞修飾について、記述・整理した。しかし考察が十分であることは認めざるを得ない。状態構文に関しては、日本語の「側面語」(高橋 1975)・「文末名詞」(新屋 1989)¹²も参考にし、またフィンランド語の受動現在分詞が用いられた他の構文とも比較したい。本稿で扱ったのは生産性の低い固定化した表現であるが、今後、受動現在分詞分詞の他の用法やモダリティ研究へ展開していくことを考えている。

参考文献

- Haspelmath, M. 1994. "Passive Participles across Languages". Fox, B. & Hopper, P. J. eds. *Typological Studies in Language 27 Voice Form and Function*:151-177. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
 Ikola, O. [et al] eds. 1981. *Nykysuomen käsikirja*. Helsinki: Welin+Göös.
 ISK: Hakulinen, A. [et al] eds. 2004. *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen kirjallisuuden Seura.
 Jaakola, M. 2004. *Suomen genetiivi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

¹¹ että 節で、ne 「それら」(=jarrupalat 「ブレーキ」)は、täytyy 「~しなければならない」の主語ではなく、vaihtaa 「換える」の目的語である (täytyy の主語は不在)。

¹² (iii) a. 彼はおとなしい性格だ。

b. 彼はおとなしい。

c. 彼の性格は、おとなしい。

(iv) a. 彼は困っている人を見たらほっておけない性格だった。(丹羽 2005:20)

b. 彼は困っている人を見たらほっておけない。

c. ?? 彼の性格は、困っている人を見たらほっておけない。(cf.(iii))

Koivisto, H. 1987. *Partisiippien Adjektiivistuminen Suomen kielessä*. Helsinki: Suomalaisen kirjallisuuden Seura.

Pekkarinen, H. 2011. *Monikasvoinen TAVA-partisiippi: Tutkimus suomen TAVA-partisiipin käyttökonteksteista ja verbiliittojen kieliopillistumisesta*. Helsingin yliopisto. (博士論文)

新屋映子(1989)「文末名詞について」『国語学』159: 75-88

高橋太郎(1975)「文中における所属関係の種々相」『国語学』103: 1-17

丹羽哲也(2005)「名詞述語文, 形容動詞述語文, ウナギ文」『日本語科学』18: 5-24

略号一覧

受現分詞：受動現在分詞

受過分詞：受動過去分詞

能現分詞：能動現在分詞

能過分詞：能動過去分詞

